

危機と向き合う姿勢

毎日新聞

2011年(平成23年)5月11日(水)

世界の鼓動

田中 均

がパフォーマンスであるかのよう
な錯覚に陥ってしまう。日本の社
会は、震災にあっても悪者を批判
することで不満を和らげる傾向が
あるのだろうか。

1923年の関東大震災は、10
万人を超える死者・行方不明者が
でた。新聞社の社屋は崩壊し、ラ
ジオ放送もなかったため、流言飛
語で多くの朝鮮人が殺され、社会
秩序は極端に乱れた。日本は不況
下でもあり、震災で大正デモクラ
シーは終焉したとされる。当時、
海軍を出動させて救援活動をし、
巨額の義援金も送ったのが米国
だ。日本を国際社会との協調路線
に引き戻そうとしたという。しか

東日本大震災で被災した人々の
苦難は計り知れない。だが、自粛
による社会の沈滞には、どこかで
歯止めをかけなければならぬ。
また、平身低頭する東京電力の社
長や幹部に、いろいろな人が傲慢
な態度で接するのにも違和感を禁
じえない。東電の危機管理は十分
ではなかったと責められるべきだ
ろうが、社長の土下座をテレビに
映せば、被災者の留飲が下がると
いうものもあるまい。

危機管理の最高責任者たる首相
を野党が激しく批判し、首相は精
いっぱいやっているのは国民にも
評価されていると思う」と苦しげ
に述べる。そのやり取りをテレビ
で見ると、虚しさや深いため息を
つかざるを得ない。まるで、全

安心安全な社会へ反転を

し、日本は関東大震災からわずか
8年で満州事変、18年で真珠湾攻
撃と、戦争の道に突き進んだ。

現代日本が、東日本大震災を契
機として排他的なナショナリズム
への道を進むとは全く思わない。
しかし、多くのメディアが口汚く
政府や東電などをたたき様を見る
と、何か不安になる。



画・onyx

今回の震災には、福島第一原発
の事故を含めて自然災害とは説明
できない面があるのは事実だろ
う。しかし、印象論や断片的な情
報だけで人災と決め付けて頭ごな
しに批判し、読者や視聴者をあお
るのは如何なものか。日本は今、
危機管理、復興に全力を傾けるこ
とが求められている。震災に政府

が、原発事故に東電が、それぞれ
どう対応したかは事実に基づき
ちゃんと検証されるべきことだ。

震災の後しばらく、諸外国は日
本社会の冷静かつ秩序だった様子
に高い評価を与えた。世界の主要
紙は、津波の言語を絶する被害を
伝えつつ、日本人の冷静さを褒め
称えた。これほど短期間に、世界

各国が多額の義援金を寄せたこと
も大変心強い。

原発事故の処理が長引くにつ
れ、潮目は変わった。原発事故は
対岸の火事ではない。原子力発電
に依存する多くの国は、事故の帰
趨を猜疑心をもって見守った。放
射能汚染は、多くの国にチェルノ
ブイリの悪夢を想起させた。日本
に滞在する外国人は一斉に日本を
離れ、なかなか戻って来ない。そ
れだけではなく、「自粛」で消費
需要が落ち込み、政治の関心は再
び「政局」に移っていく。そんな
日本に対する信認は、残念ながら
弱まる一方である。

大震災は、私たちの生き方に大
きな衝撃を与えた。目先の物質的
豊かさが音を立てて崩れる様を見
た。節電で、如何に無駄な電力を
消費してきたかを知った。考える
ことは多い。もう少し、精神的な
豊かさを求める機会にできるので
はないか。国民一人一人のみなら
ず、メディア、そして政治家の人
々も自分たちのあるべき姿を見直
す格好の機会とすべきではない
か。安心安全の、質の高い社会の
再構築のため、心を一つにして反
転できないだろうか。日本の復興
がどんな形をとるかによって、世
界の中での日本の立ち位置は大き
く変わっていくと思う。

(たなか・ひとし日本総研国際
戦略研究所理事長)